

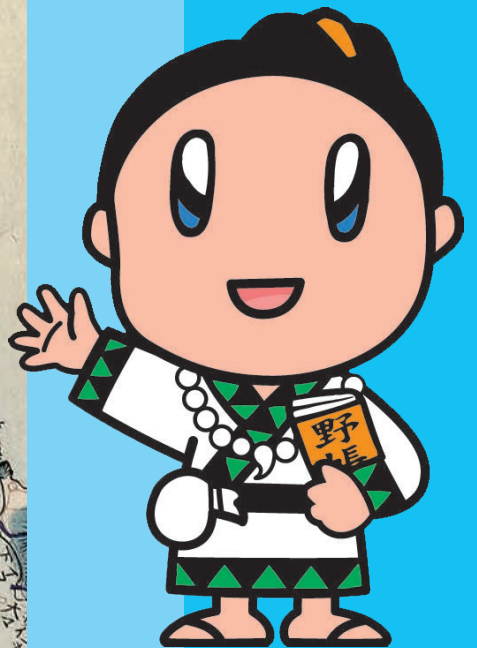
まつ うら たけ し ろう

# 松浦武四郎

郷土の偉人を知る

2

松阪市教育委員会



蝦夷元板藉豈忍付羶腥  
定遠今何在慨然看地經

庚申夏日

陶菴大橋燾題



述堂小川慎書



蝦夷闔境山川地理取調大概圖

一此圖ハ予嚮ニ著ス東西併北蝦夷山川地理取調圖ヲ

縮メ作ル処ナレハ水派山脈天度總テ前圖異ナレ

一北蝦夷地西部ナツコ東部シヨシレトコ以奥ハ

予未タ跡跋セサレハ西洋船長某ノ嘗テ

此地ヲ實測セシ圖トラフンニ審シ記ス

伝トモ沙場ニ畫シ得ルナレハ其誤モ

不少又不畫処モ小圖ノ一ナレハ

多カルヘシ



## はじめに

わたしたちの松阪市からは、  
たくさんのお偉人いじんが生まれています。  
松阪市の発展はってんにつくし、  
人々のために努力をおしまなかつた  
偉人の生き方から、  
多くのことを学んでいきましょう。  
偉人の学習を進めることで、  
ふるさと松阪を愛する心を大切にしましょう。  
そして、松阪が生んだ偉人のように、  
ゆめや希望きぼうを持って、  
未来へ羽ばたく人になってください。

## 目次

一、旅に生きる	1
二、アイヌの人たちへの熱い思い	8
三、北海道の名付け親 松浦武四郎	14
「新板蝦夷土産道中寿五六」の説明	22
「新板蝦夷土産道中寿五六」	23
北海道の地図づくり	24

### ※年れのあらわし方について

この冊子では、年れいは数え年であらわしています。  
数え年とは、生まれた年を一才として、新年が来るたびに  
一才ずつ加えて年れいを数えたものです。

# 一、旅に生きる

広大な蝦夷地（現在の北海道）をすみずみまで歩いて調べ、くわしい地図とたくさんさんの著作によって、その地の様子を伝えた松浦武四郎は、「北海道の名付け親」とよばれています。遠く離れた北海道と深いつながりを持ち、言葉も文化もちがうアイヌの人たちと心を通わせることができたのは、武四郎が旅を通して自分自身を成長させてきたからでしょう。

1

一八一八年、現在の松阪市小野江町に武四郎は生まれました。

家の前は多くの旅人が伊勢神宮をめざした伊勢街道です。旅人の姿を見ては、「この人たちはどこから来るのかなあ。この道の向こうにはどん



松浦武四郎の写真

アイヌの人たち  
北海道に昔から住んでいた人  
たち。

伊勢街道  
四日市の日永から伊勢神宮ま  
で続く道。

な世界が広がっているのだろう。いつか行ってみたいな。」と知らない土地にあこがれました。寺子屋で、読み書きを習ってからは、その思いがますます強くなりました。きっかけは『名所図会』という全国各地の有名な場所を文と絵で紹介した本でした。

「世の中にはいろんな所があるんだなあ。あの山に登りたい。

この寺にもお参りしたい。ああ、早く旅に出たい。」

『名所図会』が武四郎を旅へ誘うようでした。

武四郎が十三才のとき、世の中では「おかげ参り」という出来事が起こりました。日本の人口が約三千万人の当時、たった一年で五百万人もの

人が伊勢神宮にお参りに来たというのです。武四郎の家の前を通る伊勢街道は、多くの旅人でにぎわい、どの宿も人であふれました。日本各地から来た旅人の、旅の話や名所の話、お国自慢を聞いたたびに、見知らぬ土地へのあこがれはどんどん強くなり、もう抑えきれなくなっていきました。

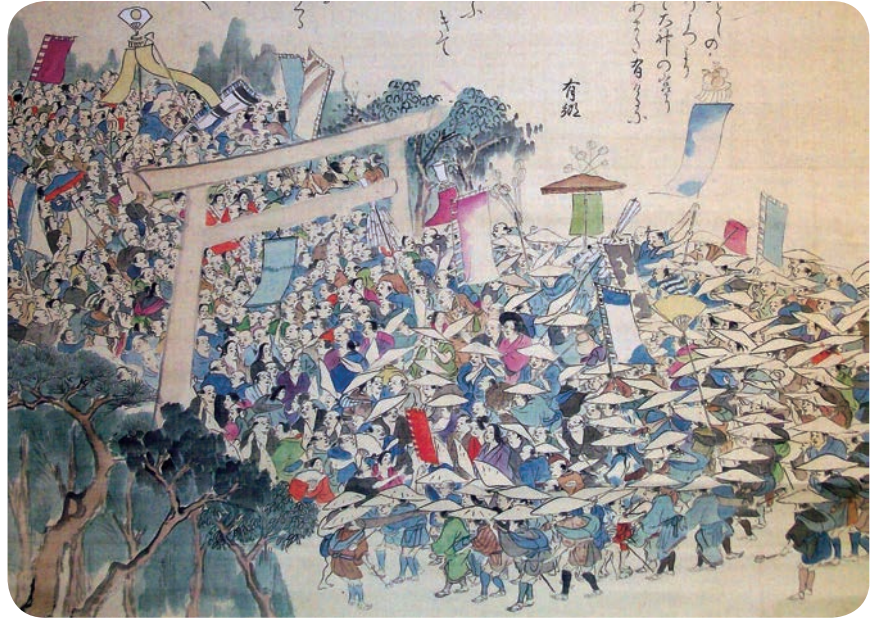
そして三年後、十六才の武四郎は家族には何も言わず、こっそり家を出て、一人



伊勢街道のにぎわい  
（『伊勢参宮名所図会』より）

#### 寺子屋

江戸時代に字を読んだり書いたりすることを習ったところ。

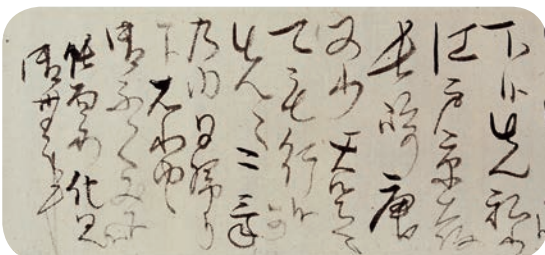


おかげ参りの様子 (本居宣長記念館所蔵)

で江戸へ向かいました。「これから私は江戸、京都、大阪、長崎に行きます。それから唐（中国）や天竺（インド）にも行くかもしれません。」知り合いに残した手紙にはそうありました。

江戸に着いた武四郎ですが、一か月後は連れ戻されました。しかし、すなおにまっすぐには帰らず遠回りして、長野の善光寺などにも寄りました。帰ってきた武四郎を見て、家族は安心するとともに「もうしばらくは旅に出るなんて言わないだろう。」

と書いていました。しかし、武四郎本人は旅先の風景や、旅の楽しさを思い出しては、旅への思いをさらに強くしていました。十七才の時、今度は両親に許しをもたせて、全国を回る旅に出発しました。



唐、天竺へ行くかもしれないと書いた手紙

善光寺  
長野県長野市にある有名な  
お寺。

世の中は天保の大飢饉といわれるとても苦しいときでしたが、江戸で覚えたはんこ作りでお金を稼ぎながら各地の旅を続けました。

「食う物のなかとなら、この芋ば持っていかんね。」

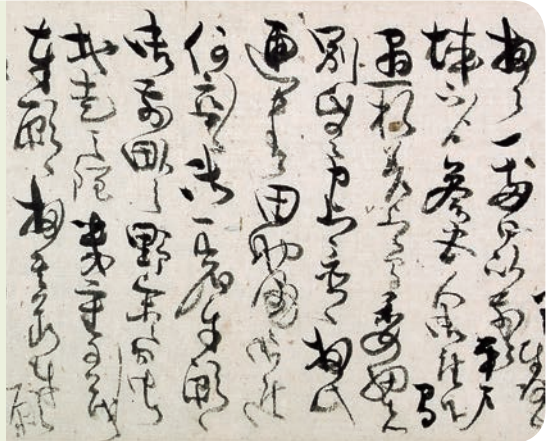
「こぎゃん雨ん中、カゼひくばい。今夜はウチに泊まるとよか。」

多くの人の親切に助けられるたびに、武四郎は世話になったお礼として、手紙を渡していました。

「伊勢神宮へお参りに行くときは、松阪にある私の実家にぜひ寄ってほしい。もてなしをするよう、この手紙に書いておくから。」

こうして、お礼と旅の様子を書いた武四郎の手紙は、伊勢神宮へお参りに行く人たちによって実家に届けられました。

病でたおれた飛騨（現在の岐阜県）では、お世話になった村役人の家で子どもたちに勉強を教えたこともありました。もちろん、よいことばかりではありません。九州では盗賊に襲われ、持っていたわずかなお金をすべてうばわれました。それ



九州の人に渡した実家への手紙（左は今の言葉に直したもの）

近いうちに、九州の平戸から伊勢参りをする人がいるので、手紙を届けてもらいます。この人たちは田助浦の方です。どうか一晩泊めてあげてください。畑でとれた野菜でこちそうしてください。どうぞよろしくお願いします。

#### 天保の大飢饉

一八三三年～一八三九年。  
洪水や冷害で全国的に作物がみならず、食物が不足したため、人々はうえに苦しみ、多くの人が亡くなった。

#### はんこ作り

武四郎は江戸へ旅をした時に、篆刻というはんこ作りを覚えた。



ひろしまけん いづくしまじんじや  
広島県にある巖島神社のスケッチ

でも「あの盗賊たちも元は農民だ。飢饉で食べるものがないので、仕方なくやっているのだ——。」と  
考え、許すことができました。それは、旅の中でたくさんの人の温かさ<sup>あたたか</sup>にふれていたからでしょうか。

3

武四郎の旅は長崎<sup>ながさき</sup>でひとまず終わることになりました。生死の境<sup>さかい</sup>をさまようほどの大病<sup>たいびょう</sup>にかかったからです。地元の人たちの熱心な看病<sup>かんびょう</sup>やお坊さん<sup>ぼう</sup>たちのおかげで、なんとか回復<sup>かいふく</sup>した武四郎は、病気が治ったことに感謝<sup>かんしゃ</sup>し、お坊さんになろうと決めました。

「これまで旅をすることができたのも、今こうして生きていられるのも、旅先で出会った人たちのおかげだ。仏様<sup>ほとけさま</sup>につかえることで恩返し<sup>おんがえ</sup>しもできるのではないか。」

このころの武四郎は、もうただの好奇心<sup>こうきしん</sup>あふれる少年ではありません。広い心を持つ



やだて ふで すみ  
スケッチを書くときに使った矢立（筆と墨）

**盗賊**  
人のお金や、宝物<sup>たからもの</sup>をぬすみ、おどし取る人たち。

た青年へと成長していました。それは全国を旅し、その土地の文化にふれ、さまざまに人と出会い、いろいろな考え方を聞いてきたからです。

当時の日本は鎖国※せこくをしていて、外国とのつきあいはありませんでした。しかし、長崎ながさきだけは、中国・オランダと貿易ぼうえきすることが許ゆるされた特別な場所でした。ここには世界の情報じょうほうが入ってきました。そして、武四郎は聞いたこともないような話を耳にすることとなりました。

「東南アジアのほとんどの国がヨーロッパの国の思うように  
されている。」

「このままでは日本も外国にいいようにされてしまうのでは  
ないか。」

「なんでもロシアが日本の北にある蝦夷地えぞちを狙ねらっているらし  
いぞ。」

日本の将来しやうらいが心配になった武四郎は、蝦夷地の情報を聞いて  
まわりますが、誰だれもくわしく知りません。

「このままでは日本はどうなるのだ。自分にできることはな



北海道の探検で持ち歩いたメモ帳「野帳」  
ほっかいどう たんけん のちよう

鎖国  
外国との貿易や交流をやめ  
て、国をとざした江戸時代の  
日本の方針。



いのか——。しかし、どこからどこまでが日本なのか。それさえもわからない自分に何ができるのか——。」

考え抜いた末に出した答えは、自分が蝦夷地のことをくわしく調べ、その様子を多くの人びとに伝えることでした。

二十八才ではじめて蝦夷地へ渡るまでの間、武四郎は蝦夷地と琉球（現在の沖縄県）以外の日本列島各地を歩いて回りました。そこにはいつも野帳というメモ帳を持ち、見たこと、聞いたことを熱心に書き記す姿がありました。武四郎の真実を見る確かな目は、こうして養われていったのです。

武四郎は旅の中で、出会い、支えてくれた人たちへの感謝を決して忘れませんでした。現在、松阪には、武四郎の友人から届いた手紙や、たくさんの人との出会いと交流を示すものが残されています。それは、旅を愛し、人と人とのつながりを大切にしたい武四郎の生き姿を今日に伝えていきます。



エドワード・モース※



勝海舟※

出会った人たちの  
サインがあるうちわ

勝海舟  
幕府の役人、政治家。

エドワード・モース  
アメリカの動物学者。

## 二、アイヌの人たちへの熱い思い

松浦武四郎は、「北海道の名付け親」とよばれています。いったいどんな思いをこめて「北海道」という名前を考えたのでしょうか。

武四郎は、「日本中のたくさんものを見て、いろいろなことを知りたい。」という思いから、十七才で日本中を歩いてめぐる旅に出ました。その旅の途中の長崎で「ロシアが日本の北を狙っている。」ということを知りました。しかし、守るべき蝦夷地（現在の北海道）の様子や人々の暮らしぶりをほとんどの人は知りません。そこで、「自分が北の大地をすみずみまで調べて、それを多くの人に伝えることが、外国から日本を守ることになるのではないか。」と考え、蝦夷地を調査することを決めました。



石狩川を舟に乗って調査する武四郎と案内のアイヌの男性たち。  
大きなふきの葉を屋根にしている。

しました。

探検の中で武四郎は、ごはんを平等に分け、アイヌの人たちと同じものを食べま



探検する武四郎と、カラフト（今のサハリン）で暮らしていた人たち

武四郎は、二十八才のときに最初の蝦夷地探検に出ます。そして、その後、合計六回の探検をすることになりました。

蝦夷地を調べていくうちに、武四郎はアイヌの人たちの苦勞を知ることになりました。蝦夷地を支配していた松前藩の役人や商人たちが、ひどいやり方でアイヌの人たちを苦しめていたので。それは、自分たちとは違うアイヌの文化を分かろうとしなかったからです。

しかし、武四郎はこのような役人や商人たちとは違いました。武四郎は、アイヌの人たちと暮らしをともにし、その言葉を学んで、アイヌの人たちに案内してもらいながら蝦夷地を調査



アザラシの図

松前藩  
江戸時代に今の北海道をおさめていたところ。

した。アイヌの人たちはとてもおどろき、親し  
みをもちました。なぜなら、そのころの役人や  
商人は、アイヌの人たちといっしょに食事をす  
ることがあまりなかったからです。

※てしおがわ  
天塩川の近くで野宿した時には、こんなこ  
とがありました。そこにはアブや蚊がとても多  
く、武四郎は一人用の蚊帳を持っていたので、  
その中に入って寝ることにしました。しかし、  
外にいた四人のアイヌの人たちは寝ようとせ

ず、たき火をしていました。アブや蚊が多くて、寝ることができないのです。武四  
郎は、「彼らが寝られないのに、自分一人だけ蚊帳の中に入って寝ることなどでき  
ない。」と、自分の蚊帳の中に四人をよんで、いっしょに頭だけを入れて寝ました。  
次の朝、五人の足は虫にさされて腫れ上がり、近くには血をいっばいに吸って飛べ  
なくなつたアブが何匹も転がっていました。

武四郎はいくつものコタンを訪れ、世話になりましたが、そのなかには年寄り



大きな葉を着た探検中の武四郎

**天塩川**  
北海道の北部を流れる二番目  
に大きな川。

**蚊帳**  
昔は寝る時に、蚊にさされな  
いよう網で囲いを作り、その  
中に入って寝た。

**コタン**  
アイヌの人たちが住む村のこ  
と。



アイヌの人たちから話を聞く武四郎

と子どもだけのコタンもありました。それは松前藩と商人たちによって、若者がむりやり連れていかれたからです。また、商人たちに川をさかのぼるすべての※サケをとられたコタンもありました。そんなことを知らなかった武四郎は、食料を分けてほしいと頼みました。そのコタンの人たちは、お礼も受け取らずに干し魚を分けてくれたのでした。あとで事情を知った武四郎は、涙を流しました。

武四郎は、厳しい自然の中でたくましく生きるアイヌの人たちを心から尊敬しました。それと同時に、松前藩の役人や商人たちのやり方に強い怒りを



サケと干したサケの図

**サケ**  
サケはカムイチエプ(神の魚)とよばれるほどアイヌの人たちにとっては大切な魚であった。

おぼえました。そして、調査の妨害や命を狙われる危険があることもかくこの上で、松前藩や商人たちのやり方を徹底的に調べ上げることが決意しました。

武四郎は六回の調査を終え、調査記録をまとめた後、自分が見聞きしたことすべてを本にして出版しました。しかし、役人や商人の悪事ばかりを書いたのではありません。蝦夷地の様子やそこに生きるアイヌの人たちの生き生きとした姿を描いたのです。「多くの人がアイヌの文化を正しく知ること、そのすばらしさに気づいてほしい。」その願いを込めたのです。

時代は明治に移り、政府は蝦夷地の開拓に乗りだしました。この地のことをよく知る武四郎は政府の役人に任命され、蝦夷地の新しいよび方を考えることになりました。いくつかの案が政府に出され、その中から武四郎の思いがもっとも強かった「北加伊道」が選ばれました。武四郎は、アイヌの長老から、この国に生まれた人を「カイ」とよぶことを聞いていました。そこで、「北にあるアイヌの人たちが暮らす大地」という思いをこめて「北加伊道」という名前を考えました。漢字は「海」に変わり、今の「北海道」になりましたが、アイヌの人たちを大切にしよう

#### 明治

一八六八年～一九二二年。

#### 開拓

深い森の大地であった北海道は、山林・原野などが切り開かれ田畑や居住地・道路がつくられた。

#### 長老

多くの経験をつんだ年寄りのこと。エカシとよばれた。

うとする武四郎の思いが込められています。

武四郎は、本の中に、

「アイヌの人たちの文化を理解しようとせず、ひどいことをする役人や商人はいる。しかし、アイヌの人たちの姿を正しく知れば、わたしたちが彼らから教えられることはたくさんあるのだ。」

と書いています。

生まれ育った地域が違くと暮らし方や文化も違ってきます。お互いの文化や考え方を理解し、尊重し合うことで、わたしたちは心豊かに生きることができるとのことです。武四郎の生き方や心から、大切なことを学ぶことができるのではないでしょうか。



武四郎が描いたアイヌの人たちの踊り「鶴の舞」

### 三、北海道の名付け親 松浦武四郎

#### 北海道の名付け親 武四郎さん

国道二十三号を通って、車で津の方へ家族と出かけたたくみさんは、雲出川くもづかわにかかる橋の少し手前に「北海道の名付け親 松浦武四郎※せいたん 生誕かんぱんの地」と書かれた大きな看板を見つけました。北海道の名付け親のふるさとが、なぜ松阪市にあるのだろうと不思議に思ったたくみさんは、その理由を先生に聞いてみました。「くわしいことは、松浦武四郎記念館という博物館があるから、行ってみたいよ。」と教えてもらいました。そこで、友だちと行ってみることにしました。



国道 23 号沿いに建つ看板



松浦武四郎記念館

生誕の地  
生まれた場所のこと。



## 武四郎さんが住んでいたところ



たくみさん

松浦武四郎記念館では展示室を見学して、学芸員の山本さんに、いろいろと教えてもらいました。

「江戸時代に武四郎さんが生まれたのは、今の松阪市小野江町というところだよ。伊勢神宮につながる伊勢

街道に沿って家があったんだ。十三才の時には、おかげ参りといって、一年間に五百万人も人が全国から伊勢神宮をめざしてやって来たんだ。家の前を通るたくさんの旅人を見た武四郎さんは、この道の先にはどんな世界が広がっているんだろう、自分も旅をして、いろいろな所を見てみたい、と強く思うようになっていったんだ。」と教えてもらいました。武四郎さんの実家が今でもあって聞いて、記念館から歩いて行ってみました。すると、武四郎さんの家だけが江戸時代のままの姿で残っていて、びっくりしました。



伊勢街道  
四日市の日永から伊勢神宮まで続く道。

## 多芸多才な武四郎さん

武四郎さんは、好奇心がとても強い人でした。十六才で初めて江戸まで旅をして、はんこを作る技を身につけました。二十九才の時に北海道で、たった一日で百個のはんこを作った記録もあります。

また、旅に出るときは、必ずメモ帳を持ち歩き、風景をスケッチしたり、見たことや聞いたことを細かく記録しました。旅では、たくさんの人たちとも交流し、たくさんの方の知識や知り合いを増やすことができました。

武四郎さんはくわしい北海道の地図も作りました。方位磁針で方角を測り、歩幅で距離を計算し、地名をメモ帳に記録して、北海道の地図を完成させたのです。

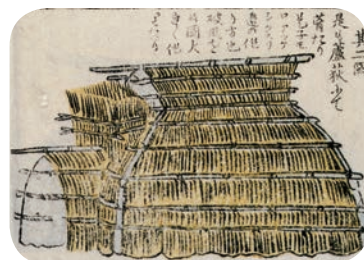


武四郎さんの実家（松浦武四郎誕生地）



武四郎さんが書いた151冊の本

二十八才から北海道を探検した武四郎さんは、古くから北海道に暮らすアイヌの人々と出会います。初めはアイヌ語が分からないので、一生懸命アイヌ語を覚えて、仲よくなっていきました。チセ（アイヌの人々の家）に泊めてもらうことも、ご飯と一緒に食べることもありました。各地のアイヌの人々のおかげで、六回も北海道を探検することができました。探検の記録を、百五十一冊の本にまとめ、有名になっていった武四郎さんは、明治になると政府の役人に任命されました。武四郎さんは、「北のアイヌの人々が暮らす大地」という思いをこめて「北加伊道」という名前



チセ

明治  
一八六八年～一九二二年。

を考え、それが今の「北海道」になりました。

また、アイヌの人々を尊重し、アイヌ語の地名を大切にしました。現在の北海道にある「郡」の名前は、アイヌ語の地名にもとづいて、武四郎さんが提案したものです。

## 旅に生きた武四郎さん

武四郎さんはとても旅が好きで、沖縄以外の日本全国を歩きました。年をとってからも、さまざまなお場所に出かけました。六十八才の時には、妖怪がいると言われ、登る人も少なかった大台ヶ原に三回も登りました。七十才の時には富士山にも登っています。足や腰が痛くなり、歩くことが大変になると、もう自分の人生が長くないことを感じます。これまでに出会った全国の人々をお願いをして、各地のお寺や神社などから古い木を送っ



武四郎さんの畳一枚の部屋  
(東京の国際基督教大学にある)

大台ヶ原  
三重と奈良の県境に連なる  
高い山々。



漫画「松浦武四郎 道をあるき、道をつくる」(各小学校に所蔵)

てもらい、畳が一枚の広さしかない小さな部屋を作りました。そして、その部屋で、今までの旅の思い出をふりかえりながら、七十一才で人生を終えました。

今、北海道の多くの場所に、武四郎さんの記念碑が建っています。また、武四郎さんの探検がきっかけで松阪市と、北海道との交流がさかんに行われています。たくみさんは、武四郎さんの生涯を漫画にした『松浦武四郎 道をあるき、道をつくる。』という本を紹介してもらいました。そして、くわしく武四郎さんのことを調べてみようと思いました。



武四郎さんの記念碑 (美深町)



武四郎さんの記念碑 (留萌市)



武四郎さんの銅像 (釧路市)

## ◆ たくみさんの見学メモ ◆

・ 武四郎さんはこんな人



### とくぎ

- ・ 身長は148cmと小柄<sup>こがら</sup>だったけど、一日に歩いた距離<sup>きょり</sup>は60kmをこえていた。
- ・ 70才<sup>ふじさん</sup>で富士山に登った。
- ・ たくさんの短歌と漢詩をつかった。
- ・ 一日に百個もハンコを作ったことがあった。
- ・ 絵もとくい。自分が見た風景や人の様子を本の中にたくさんかいた。



### 好き!

- ・ 大好物は、節分<sup>せつぶん</sup>の時に投げる大豆のいり豆。
- ・ 個性的<sup>こせいてき</sup>で独自のファッションセンス。



### しゅみ

- ・ 子どものころから、しゅみは古いもの集め。
- ・ 内容は勾玉<sup>なまがたま</sup>、古銭<sup>こせん</sup>、珍しい石<sup>めづら</sup>、鏡<sup>かがみ</sup>、鈴<sup>すず</sup>などたくさん。
- ・ 自分の家で展覧会<sup>てんらんかい</sup>をひらいた。



## ◆ たけちゃんの豆知識 ◆

### 探検について

- ・ 北海道<sup>たんけん</sup>の探検は、雪山<sup>ゆき</sup>を歩いたり、森<sup>の</sup>の中で野宿<sup>のじゆく</sup>をしたり、大変だったけど、アイヌの人たちに助けてもらったんだ。
- ・ 北海道だけでなく、昔からアイヌの人たちが暮ら<sup>く</sup>していたカラフト（今のサハリン）や千島列島<sup>ちしま</sup>も、探検をしたんだよ。
- ・ 北海道の探検の記録は151冊の本にまとめられているよ。



たけちゃん

### 地図について

- ・ 機械がない時代に、歩いて探検しただけですごくくわしい北海道の地図を作ることができたんだよ。
- ・ 地図に書かれている小さな字はアイヌ語の地名で、一万近くもあるんだ。アイヌの人たちに聞いて、一つひとつの地名を調べていったんだよ。

### 調べてみよう

- ・ 武四郎さんの地図にある地名は、今の北海道の地図にはどのように書かれているか調べてみよう。
- ・ アイヌ語の地名には意味があるんだ。どんな意味があるか、調べてみよう。
- ・ 江戸時代に北海道の海岸線<sup>そくりょう</sup>を測量<sup>い</sup>した伊能忠敬<sup>いのうただなか</sup>という人の地図があるけど、それとくらべて、どこが違うのか調べてみよう。

## 松浦武四郎さん年表

西暦	年齢	おもなできごと
一八八八年	71	二月十日に東京の自宅で亡くなる
一八八七年	70	三回目の大台ヶ原登山、富士山に登る 置一枚の広さの部屋を作る
一八八五年	68	初めて大台ヶ原に登り、七十才まで三回登る
一八八〇年	63	東京から奈良へ旅行すると、飯南・飯高を歩き、 粥見の辻屋新七に泊まり、高見峠をこえる
一八六九年	52	明治政府の役人になり、北海道の名前を考える
一八五八年	41	六回目の蝦夷地探検の後、地図や記録を作り始める
一八五六年	39	江戸幕府の役人になる、四回目の蝦夷地探検
一八五三年	36	飯南の仁柿峠をこえ、上仁柿の尾張屋に泊まる
一八四六年	29	江戸から京都へ行った帰りに伊勢本街道を歩き、
一八四五年	28	二回目の蝦夷地探検の後、一日にはんこ百個を作る
一八四三年	26	初めて蝦夷地を探検、四十一才まで六回探検する
一八三八年	21	長崎で大病にかかり、お坊さんになる
一八三四年	17	全国各地をめぐる旅に出る
一八三三年	16	家を出て、一人で江戸まで旅をする
一八三二年	15	魚町の長谷川家で本居宣長さんの集めた鈴の絵を写す
一八三〇年	13	津で平松楽齋先生に勉強を教わる
一八二四年	7	近くのお寺で読み書きを習う
一八一八年	1	二月六日に今の松阪市小野江町で生まれる



大台ヶ原にある武四郎さんのお墓  
(奈良県上北山村)



東京の梁井霊園にある武四郎さんのお墓  
(東京都豊島区)

**平松楽齋**  
津にいた有名な学者。

**竹川竹斎**  
射和文庫という図書館を作った商人。

**物産会**  
めずらしい物を見せ合う会。

**伊勢本街道**  
奈良から伊勢神宮につづく昔の道。武四郎は櫛田川沿いに歩いて伊勢に向かった。

# 「新板蝦夷土産道中寿五六」の説明

- このすごろくは、1864年に松浦武一郎が作ったものです。函館を出発して海側をぐるりとまわって函館に戻ってくるという北海道を一周した気分になれるスゴロクです。
- 自分の止まっているところがどこか、北海道の地図で探しながら遊びましょう
- アイヌ語の地名(※) がたくさん出てきます。アイヌ語の地名の意味も調べてみましょう。

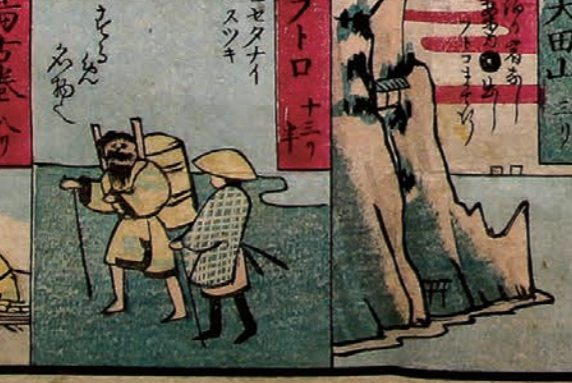
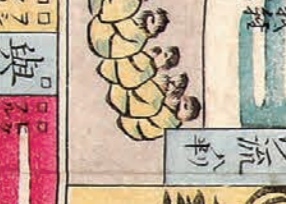
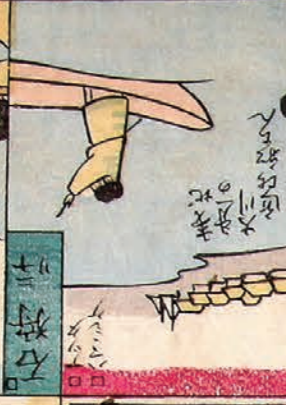
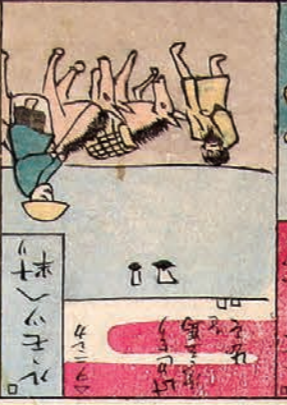
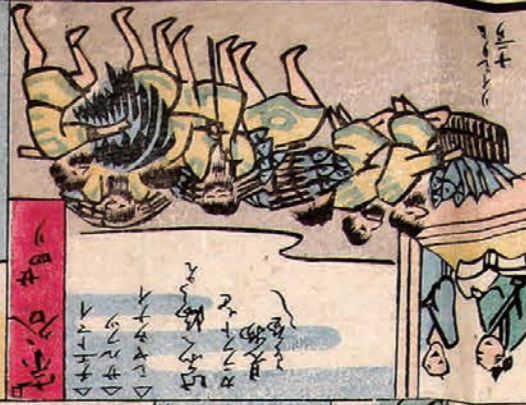
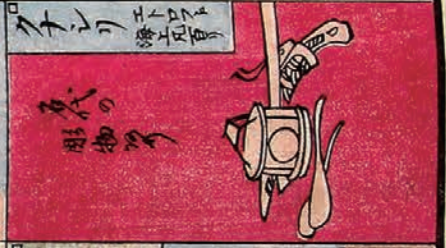
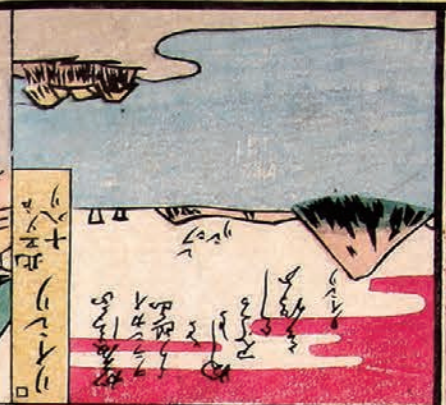
順番	すごろくの地名	今の地名	進む、寄り道、一回休み など	20	きたえ ぞち 北蝦夷地	からふと 樺太	18「宗谷」に止まらなかったら通らなくていい。ここで1か6の目が出たらゴール。
1	はこだてみなと 箱館湊	はこだて 函館	サイコロの1が出たら、8「ウタシツ」へ進む。	21	エサシ ※	えさし 枝幸	
2	まつまえじょうか 松前城下	まつまえ 松前		22	もんべつ 紋別 ※	もんべつ 紋別	
3	えさし 江刺 ※	えさし 江差		23	しゃり 舍利 ※	しゃり 斜里	
4	くまいし 熊石 ※	くまいし 熊石	切手(パスポート)を忘れ、1「箱館湊」まで取りに戻る。	24	ねもろ 根諸 ※	ねむろ 根室	ここに止まると、25「クナシリ」、26「エトロフ」を見に行く。
5	おおたさん 大田山 ※	おおたさん 太田山		25	クナシリ ※	くなしりとう 国後島	24「根諸」に止まらなかったら通らなくていい。
6	フトロ ※	ふとろ 太櫓		26	エトロフ ※	えとろふとう 択捉島	24「根諸」に止まらなかったら通らなくていい。ここで年をこすので一回休み。
7	しまこまき 島古巻 ※	しままき 島牧		27	アツケシ ※	あつけし 厚岸	
8	ウタシツ ※	うたすつ 歌棄		28	くすり 久摺 ※	くしろ 釧路	
9	いわない 岩内 ※	いわない 岩内	ここに止まったら、新しい道を通して、11「與市」に進む。	29	とがち 十勝 ※	とがちぶと 十勝太	
10	シヤコ丹 ※	しゃこたん 積丹		30	ほろいずみ 纒泉 ※	ほろいずみ 幌泉	
11	與市 ※	よいち 余市		31	シヤマニ ※	さまに 様似	
12	ヲタル内 ※	おたる 小樽		32	みつし 三石 ※	みつし 三石	
13	いしかり 石狩 ※	いしかり 石狩		33	さる 沙流 ※	さるぶと 沙流太	
14	ましけ 増毛 ※	ましけ 増毛		34	ユウブツ ※	ゆうふつ 勇払	ここに止まると、千歳を見に行くので一回休み。
15	るもっぺ 留萌 ※	るもい 留萌		35	モロラン ※	むろらん 室蘭	
16	とままえ 篷前 ※	とままえ 苫前		36	ウス ※	うすざん 有珠山	
17	てしお 手塩 ※	てしお 天塩		37	ヲシヤマンベ ※	おしやまんべ 長万部	ここに止まると、新しい道を見に行くので一回休み。
18	そうや 宗谷 ※	そうや 宗谷	ここに止まると、20「北蝦夷地」を見に行く。	38	やまこし 山越内 ※	やまこし 山越	
19	リイシリ ※	りしり 利尻	18「宗谷」に止まらなかったら通らなくていい。	39	あが 上り	はこだて 函館	ぴったり止まらなくてもゴール。



新帳 東土産道中巻五六

しるはしとあはれとていへば  
 △河の新番所  
 □倉本屋工左

箱館湊 松前  
 廿五





ちゅうけいSUN

# ほっかいどう 北海道の地図づくり



たけちゃん

## いのただ たか 伊能忠敬さん

海岸線の経度と緯度を測量して  
正確な北海道の形がわかるよう  
になりました。  
内陸は深い森におおわれていた  
ので測量ができませんでした。

## 松浦武四郎さん

海岸と内陸を歩いて調べ、どこに  
山や川があるかといった地理や、  
アイヌの人たちからも聞いた地名が  
9800も表わされています。

忠敬さんは器具を使って測量をすることで北海道の正確な形を明らかにしました。

一方、武四郎さんは歩く歩幅で距離をはかり、メモ帳に景色をスケッチし、方位磁針で方角を調べたり、アイヌの人びとに教えてもらうことで、内陸の様子を明らかにしました。



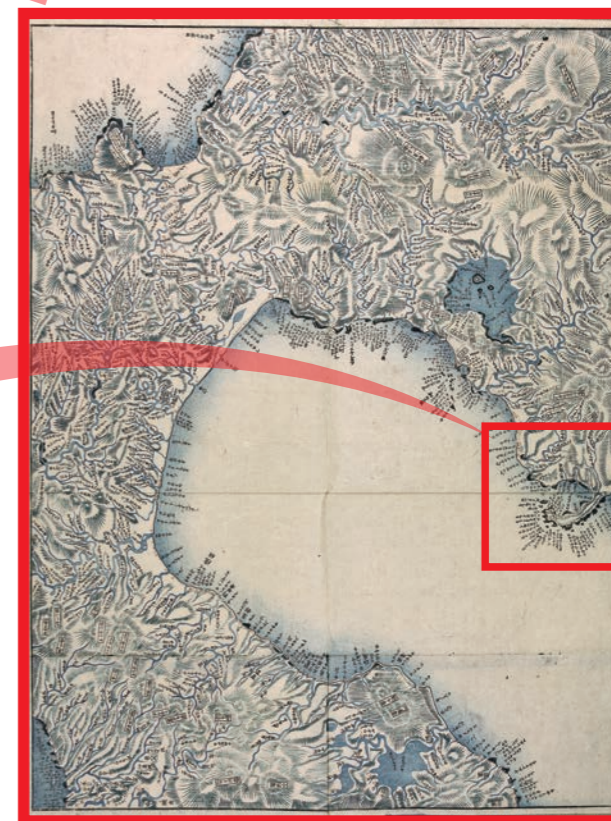
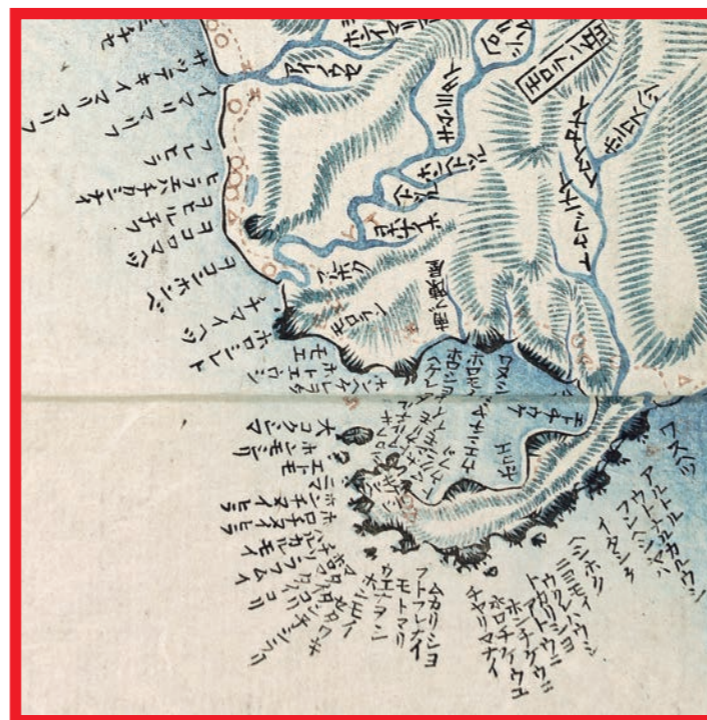
1821年 伊能忠敬さんの地図

だいにほんえんかいよちぜんずしょうず  
大日本沿海輿地全図(小図)  
縦 161.6cm 横 181.1cm  
(神戸市立博物館所蔵)



1859年 松浦武四郎さんの地図

とうざいえぞさんせんちりとりしらす  
東西蝦夷山川地理取調図  
縦 243.0cm 横 364.0cm  
(松浦武四郎記念館所蔵)



## 編集後記

松浦武四郎は、松阪出身の探検家であり、文人でもあります。旅を通じて全国各地の文化に触れ、多くの人々と交流しながら、各地の調査記録を数多く書き残しました。また、様々な学問の分野に関心を示し、生涯に二〇〇冊を超える書物を著すとともに、アイヌの民族が安心して暮らせる社会をめざしました。

伊勢街道が通る松阪市小野江町には、武四郎の誕生地（松阪市指定史跡）や、少年時代に学んだお寺「真覚寺」があります。また、松浦武四郎記念館では、松浦家から寄贈された貴重な資料が保存・公開され、そのうち一五〇三点が国の重要文化財、二二三点が三重県有形文化財に指定されています。

松阪市では、毎年二月末の日曜日に「武四郎まつり」を開催し、地域を上げての顕彰活動を行っています。また、一九六〇年九月には、アイヌ語研究で著名な金田一京助博士が誕生地を訪れ、誕生地裏に一本の桜を植えられましたが、その桜は今でも毎年きれいな花を咲かせています。

一章の「旅に生きる」では、北海道探検に出かけるまでの松浦武四郎を取り上げています。好奇心旺盛な武四郎少年が、見知らぬ土地を旅し、多くの人と出会うことで、自身の見識を広めるとともに、様々な価値観を受け入れる広い心を持った大人へと成長する姿を描きました。また、旅の先々で人の温かさに触れることによって、人との出会いや感謝を忘れなかった武四郎の思いを学んでほしい題材です。

二章の「アイヌの人たちへの熱い思い」には、厳しい自然の中で生きるアイヌの人々のたくましさや、アイヌの文化を尊重した武四郎の姿を描きました。武四郎が「北海道」という名に込めたアイヌの人々への思いとともに、偏見を捨て、真実を知ることと文化の違いを越えて人は理解し合えるという思いにも出会わせたいと考えます。

三章の「北海道の名付け親 松浦武四郎」は、地域の教材を活用して学ぶ学習に使用できる題材です。多芸多才であり、旅に生きた武四郎の足跡を辿るといった内容になっています。子ども自らが、地域

の偉人松浦武四郎を「調べ、考え、表現する」主体的な学習を行うことを通じて、学び方や調べ方の基礎・基本が育てられる題材でもあります。この他にも「見学メモ」「豆知識」を通じて、武四郎の業績や人がらを知ることができます。

綴じ込みの双六「新板蝦夷土産道中寿五六」は、蝦夷地の旅を題材に武四郎が作ったものです。子どもたちが遊びを通じて、北海道の地名等に関心興味を持つことをねらいとしています。

この冊子は松阪市内の小学校五年生が、国語科・道徳・社会科・総合的な学習の時間等で郷土の偉人松浦武四郎を学ぶ際、三時間程度使用することになっています。しかし、それ以外の学年や多くの学習の場においても活用されることを願っています。

協力してくださった方（敬称略、順不同）

高瀬英雄、島崎良、伊藤茂、草分京子、楠堂晶久

伊能忠敬記念館、伊能忠敬大河ドラマ推進協議会

神戸市立博物館、国際基督教大学

松浦武四郎記念館、松阪市立小野江小学校、本居宣長記念館

郷土の偉人に学ぶ教育推進委員会（編集委員）

門 暉代司（松阪市文化財保護審議会委員）

松本 吉弘（松阪市立松江小学校校長）

山本 命（松浦武四郎記念館学芸員）

近藤慎一郎（松阪市立第五小学校教諭）

杉浦 久美（松阪市立山室山小学校教諭）

中西 祐司（松阪市子ども支援研究センター長期研修員）

成瀬 佐和（松阪市教育委員会学校支援課指導主事）

※「松阪」の表記について

江戸時代の松阪の町は、現在より狭い地域をさして「松坂」の字が使われましたが、この冊子では原則として「松阪」で統一しています。

※特にことわりのない資料につきましては、松浦武四郎記念館の所蔵です。



山丹人  
蝦夷人ナル  
モノカアナイ等ニ

審記スモノナリ

一圖中七種ノ人物ヲ記ス

然レモソノ人者ハエトロフ人ノ種タライカ人ハ北蝦夷人ノ種ナル

彼地ヨリ漸ニ南選シ来ル者ナリ閱者ソレ等ノヲ弁シ玉ハソレ等ノヲ弁シ地名ヲ

我カ著ス日誌ニ就テ閱シ玉ハ如此綿連タル島峙惣テ我カ

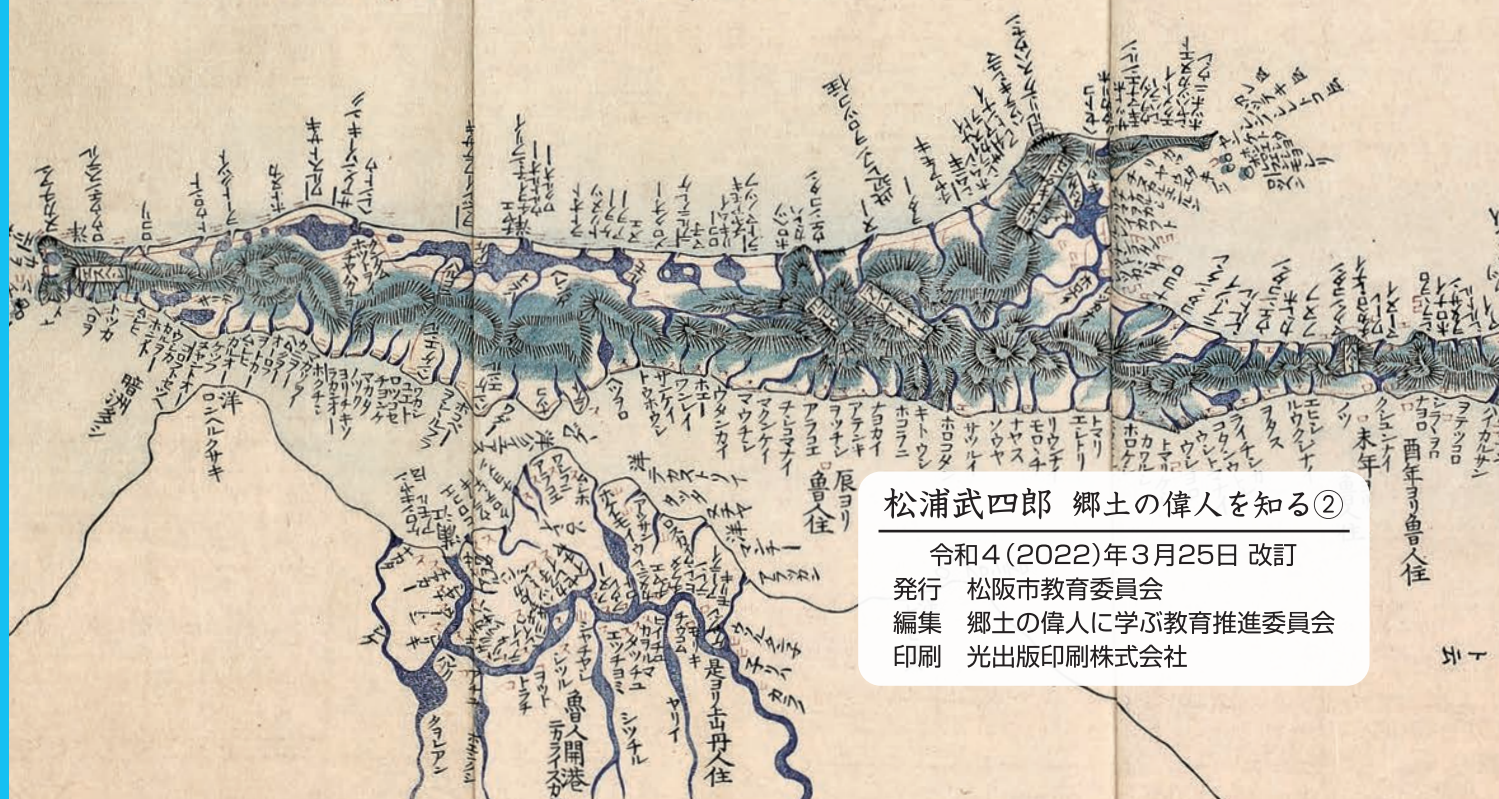
皇國ノ版籍タルヲ明弁シ線一葦水ヲ隔ルル山且地ハ滿清ニ統屬タルヲ知ラル嗚呼今是ヲ外邦ニ比シ輜車ヲ入レサルヲヤ一エトロフ島以奥東察加ニ到ル蝦夷人ヲ弗加ト稱スルノ諸嶋今是ヲ審ニスル物ナシ依テ予エトロフ島ニ遊シ時シヘト口酋長併ラソワ人某ニ正レ記ス故ニ其地名總テラソワ人エソ人ノ稱ヲ以テセリ

一圖中朱印ヲ以テスルモノススメリンクルタタライカヲヲ口ツコニクフンコンテキヲラソワニ蝦夷人トス然レモ印スルニ部落ノ地限ナケレハ其大畧ヲ以テ推シ玉ヘ又山丹人ハ交易場ヨリ以奥總テ住スカ故ニ是ヲ記サス山丹滿州ノ地總テ其住所少カラサレハナリ

一印ヲハ止宿所ニ大港コ小港トス其他會所運上屋益所村落等印分スルニ限ナケレハ記サ、ルナリ其審ナルヲ得玉ハント欲シ玉ハ、山川地理取調圖併セ日誌一百八十余卷ヲ閱シ玉ハ、ソヲ希ノミナリ

安政七 庚申孟春

多氣志樓主人源弘誌



松浦武四郎 郷土の偉人を知る②

令和4(2022)年3月25日 改訂

発行 松阪市教育委員会

編集 郷土の偉人に学ぶ教育推進委員会

印刷 光出版印刷株式会社

酉年ヨリ魯人住